一一二七～二八年のフランドルにおける政変とフランス国王の対応

守山記生

はじめに

筆者は、かつて、一一二七年三月二日のフランドル伯シャルル・ル・ボンCharles le Bon（以下、シャルルとのみ称す）のブリュージュのサン・ドナティアン教会での暗殺により生じたおよそ一年半におよぶ政治的変動について論じた。[1] それらの論考で、特に後者で筆者は、「おわりに」で次のような結論と展望を書いた。[2] 即ち、「フランス国王ルイ六世（以下、単に国王と称す）などの動きはそれぞれ注目される。しかしながら、フランドルというプランシポーテの支配の体現者たらんとして伯位の相続争いに登場した七人ばかりの大貴族（特にギヨーム・クリトンとティエリ・ダルザス）の動向が最も注目される。そして、彼らに劣らず重要なのは市民階級の動向である。彼らは基本的には連帯し、彼らの意向を組み入れなければ、次期の伯政権は安定を期しえないほどの勢力の高揚を示したのであり、十二世紀初期のフランドルにおける政治的変動のキャスチング・ボートを握ったのである。従って、国王などの動向の検討もさることながら……。」と論述したのであり、当時大貴族（特にフランドル伯）と市民の二本柱で政治は推進されたと考えたのである。しかし、上述のとおり一定の留保をつけておいた。それが、この政変における国王の動向である。この小論は、国王がどのような役割を果したのか、史料を参考に出来るだけ具体的に考えたいと思う。

(I) 有効な史料群[3]

フランドルへの国王の干渉を研究するには数点の史料の状況によりかなり容易である。恐らく、外交史料はほぼ完全に欠落しているが、反対に、同時代の詳細で、さらに、非常に情報を知っている人物、即ち、事件目撃者による叙述史料を幾つか使うことができる。

このような人々のうちでシュジェールは『ルイ六世肥満王伝』で伯シャルルの暗殺について一章をあてている。[4] 彼の語りは短かく、この著者は国王に随行してフランドルに行ったのではない。彼の証言は、別の史料の証言により、しばしば立証される。この証言は、著名なサン・ドニ大修道院長が国王の取り巻きの人々と行った対談に由来する。

テルアンヌの助祭長ゴーティエは、一一二七年末かあるいは一一二八年の初めにシャルルの伝記を書いた。彼は個人的知識から、伯領の南部と南西部で生じたことを知っており、ブリュージュと恐らくアラスで生じた幾つか事件の現場目撃者の証言を収集した。[5]

トゥールネのサン・マルタン大修道院長のエルマンは、我々に興味深い付随的な出来事を引き受けている。彼はとても情報を知っている。即ち、彼は、ノアイヨン司教が国王の命令で、伯の葬儀を主催するためブリュージュに赴いた時に、これに随行していた。彼が司教と持った親密な関係により、一一二七年四月以前においてさえも、ルイ六世の側近の中で生じた事を知ることができた。[6]

最後に、ガルベールがいる。彼はブリュージュで生じた事件の全ての目撃者であり、史料の一類型である日記という語り口の中で、事件を記している。彼は惨劇の登場人物を仕事から判断し、その事について非常に多くを知っている。しかし、この人物は伯の書記官であり、伯をよく書くのは当然であり、我々は伯等の行為については客観性をもたせ、割引いて考える必要がある。彼の社会的身分はブリュージュ市民であるが、領域管理の役職に属する伯の役人でもあり、現実的な人物であり、制度がいかにして機能するかを知っている人物である。事実、国王について国王単独の行為や伯が国王と共にした行為等をかなり詳細に述べており、これを優先させ、最重要の史料[7]として多用したいと思う。

（Ⅱ）政変の略説[8]

（A）シャルルの生と死、そして名声

シャルルは一一一九年にフランドル伯になった。[9] 一一二四年から二五年までの飢饉によってフランドルは荒廃したが、特に伯は貧者達を救った。一一二五年にはシャルルは帝冠を与えられたがこれをことわった。飢饉もやみ、シャルルは政治的秩序をとりもどそうとする過程で伯のいわば次位にあったエランバルド家が隷属的起源であることを知った。エランバルド一族は追いつめられているのを自覚し、同家のトップであるサン・ドナティアン教会の首席司祭ベルトゥルフと彼の甥たちは、その起源をとりのぞこうと死物狂いになる。彼らはとうとう、伯に対して陰謀を決め、ボルジアルという人物が中心となり一一二七年三月二日に伯を殺害する。シャルルの殺害後、一時はブリュージュを主にしてパニック状態になる。

（B）反乱の鎮圧

ブリュージュの攻囲によって、反乱者たちは城砦へと撤退される。攻囲に関して、ジェルヴェとブリュージュ市民達は協定に達する。両者は城砦の攻囲を始める。一一二七年三月一〇日最初の貴族達が到着し、彼らは誓約同盟を形成する。三月一四日から三月一五日まで、ガンの人々が到着する。三月一九日、城砦の強襲が行われる。反乱者たちは教会内に撤退され、籠城軍は教会で防禦しようとする。三月一七日、ベルトゥルフは逃亡する。一一二七年三月二〇日から二二日まで、国王はアラスへと貴族達を召集する。三月三〇日、貴族達はアラスからもどり、伯としてギヨーム・クリトンの選出を告げる。三月三一日から四月二日まで、ブリュージュとガンの人々はギヨームを受け入れることを決定する。四月二日、ジェルヴェはブリュージュの城主に指名される。四月五日と六日、伯はサン・ドナティアン教会参事会員とブリュージュとアールデンブールの市民達に特許状を与える。四月一一日、フランドル伯の候補者のひとりであるギヨーム・ディープルはベルトゥルフを死に至らしめる。

反乱者たちは祭壇から追い出される。四月一一日、一二日、ブリュージュの市民達は攻囲を続け、国王と貴族達は攻撃の新たな計画をたてる。四月一三日、国王は財産を獲得する。四月一四日、攻囲者たちは教会の囲壁をつき破り、

同日、籠城軍は回廊から塔へ追い出される。四月一六日（？）新しい伯ギヨーム・クリトンは、サン・トメールで歓迎される。四月一八日、籠城軍は降伏者になることを求める。

反乱者たちは塔から撃退し、四月二九日、二七人が降伏者となる。同日、攻囲軍たちは塔を掠奪する。四月二〇日、司教座聖堂参事会員たちは教会を浄化する。四月二二日、ノアイヨン・トゥールネ司教シモンはシャルルのためにミサをとり行い、二五日、サン・ドナティアン教会は浄化され、伯シャルルはそこに埋められた。五月一日、シャルル暗殺の中心人物であるボルジアルは絞首刑に処された。反乱者たちは塔の頂上からほうり出される。[10] 九月一〇日の後、ギヨーム・ディープルはブリュージュへ連行され、一〇月八日にはリールへ連れていかれその地の城主に委ねられた。

一一二七年九月一七日、伯ギヨームはブリュージュ市民達を疎んじる。即ち、聖ランベールの日に、伯はイープルに向けて出発する丁度その時に、公約に反してブリュージュ市民から免除していた通行税を要求した。何故なら、彼の家臣達は彼の先任者たちである諸伯の時代から通行税の収入で知行を与えていたからである。彼の家臣達は伯を悩ませつつあった。何故なら、その通行税をブリュージュの民衆に対して免除していたからである。

（C）一一二八年。混乱の年そして政治的・社会的不安の終息

伯がブリュージュ市民を疎んじた少し以前、一一二七年八月一日に、リールの市民達は反乱をおこした。その原因は、サン・ペトロの祝日に、リールでの定期市の時に、伯が市場で彼のひとりの隷属民を捕らえようとしたからである。リールの市民達は武装して飛び込んできて、伯と伯の家臣達を都市の外に追い払った。伯は直ちにリールのすべての領域を攻囲し、市民達に一四〇〇マルクの銀貨による罰金を課した。以後これらの市民達と伯の間で敵意を生み、両者は互いに疑いをもって見るようになった。

一一二八年二月八日、サン・トメールの市民達は反乱をおこす。何故なら、市民達の財産を暴力的に奪うことをやめない人物をその地の城主として従うように伯は市民達に強制したからである。伯は大軍でサン・トメールを攻囲した。しかし、市民達は伯シャルルの甥アルヌルフを、こっ

そりと彼らの都市内に入れ彼にオマージュを呈し、忠義を誓った。けれども、反乱者たちは伯の来襲に抵抗できないと恐れて降伏した。伯は市民たちに罰金六〇〇マルクの銀貨を出すことを命じた。この事件の以後、リールの場合と同様に、双方に不和が生じた。

一一二八年二月一六日、伯の権力はガンで挑戦される。ガンの人々は先ず彼らの城主に対して蜂起した。[11] 何故なら、その城主の対応はガンの人々の意にかなうものでおよそなかったからである。城主は伯の許に行き、彼自身と市民達の間に平和を回復するために伯をガンに連れてきた。しかしながら、伯は城主の意にも反して、市民達だけを抑圧し続けた。その時、市民達は、貴族のダニエルとボードゥアンの兄弟イワンと共に行動することを誓っていたので、イワンは市民達の代弁者として次のような発言をした。「……何故なら、我々は国王と殿との間の仲裁人であり、殿はこの土地の名誉と我々の助言をかえりみないでは伯領でどんな重要なことも出来ないということを保証する我々は仲裁人であるからです。そして、前述の国王に対する殿の保証人である我々に対してだけでなく、国王と殿自身の両者によって誓われた誠実や誓約に反して、ほとんど、全フランドルの市民達に対しても又殿は専横にふるまわれてきました。」そして、イープルで平和裡に会議を開くことについては伯の違反のため流会となり、[12] イワンとダニエルらとやがて市民達は伯に対してなしてきたオマージュを排斥した。

三月一一日、伯シャルルのいとこで若きティエリがアルザスからガンにやって来たという知らせがブリュージュの人々に届いた。ティエリは伯ギヨームとその家臣であるノルマン人たちが追い出され、自分が伯として歓迎される時まで待つという知らせもブリュージュに届いた。フランドル人達は同時にかくも多くの領主達をもった。即ち、アラスとその近隣の人々に支持されているモンスからの若い伯、サン・トメールでひそかに認められているアルヌルフ、そしてガンでいまや待っており、イワンやダニエルに支持されているティエリ、そして抑圧的な伯ギヨームである。従って、アナーキー状態がフランドルをおそう。

一一二八年三月二一日、伯ギヨームに対するサン・トメール市民の怒りはとどまることを知らなかったが、伯は同市を急襲し、アルヌルフを降伏させた。三月二三日と翌二四日、伯ギヨームに反抗する動向がガンやブリュージュで

大きくなる。三月二五日、ティエリ・ダルザスはブリュージュからの支持を引きつける。三月二六日、ジェルヴェはブリュージュを去り、イワンとダニエルは、ティエリを同市に連れてきた。

一一二八年三月三〇日と翌三一日、貴族達と市民達はブリュージュでティエリを伯として選び、ティエリは彼の貴族達とこの土地の民衆に対して諸権利を与えた。同日中にイワンとダニエル、そして翌日、ガンとブリュージュの市民らは、フランドル人の伯として彼にオマージュを呈した。ブリュージュ市民らが、愛着を示していたジェルヴェは、四月二日、ティエリのもとへやって来、ジェルヴェは伯ティエリの家臣となった。四月九日、イープルの市民達はティエリに近づく。イープルのある人々は、ブリュージュの彼の館のバルコニーにいた伯ティエリの面前にやって来た。彼らは、イープルの解放を求めもし市民達がイープルから伯ギヨームを追い出したなら、伯ティエリがその翌日ただちに市民の助力に来てもらいたいと要望した。

四月一〇日、国王はブリュージュの市民達に書簡を送った。以下、要点をのみ記す。即ち、市民達が八人の責任ある人達を国王に謁見するためにアラスに送ること。同様にフランドル地方の他の都市からも召集すること。貴族も加わり、市民らと伯ギヨームとの間の闘争の原因と問題の骨子を再考することによって、国王がお互いの間での平和的に安定をもたらすことを試みること。以上のような要旨の国王から送られてきた手紙に対して、都市民はフランドル伯の選出権は封建主君である国王でなく、フランドルの大貴族と市民にあると宣言し、国王の要求を無視した。[13]

闘争が続く中で、伯ギヨームは、当時、フランスに位置するコンピエーニュに、国王から助力と助言を得、フランドルでの自分の権力を維持するために、フランス国王に会うために行っていた。

一一二八年五月二日、ガンで伯ギヨームの支持者たちが抵抗する。五月六日、国王は、大司教たち、司教、大修道院長たち、聖職者と民衆の双方から責任を有する人々、伯達と貴族達に、国王がこれらふたりの伯達について会議を開き、彼らのうちのどちらかを国王の権力によって彼が伯につかせるべきかを決めるためにアラスにいる彼の許に来るように召集することにたずさわっていた。五月二一日から三一日まで、伯ギヨームは勢力を拡大さえする。

一一二八年六月一〇日、ティエリはブリュージュに来る。

彼は、ガンの周辺にあるすべての村落をまわった後、ブリュージュにやってきて、同市の人々によって大変な喜びでもって迎えられた。六月二一日、ティエリはアクスポエールの戦いで敗北させられる。七月四日に伯ギヨームはオーストカンプを手に入れようと試みる。七月一一日、人質はブリュージュで交換される。

一一二八年七月二七日あるいは二八日、伯ギヨームは次のような結果で死去した。即ち、伯ギヨームは、アロストの城砦で攻囲中に、馬から投げ出された。彼は起き上ったが、しかし、彼の武器に向って自分の右手をのばそうとした時、ひとりの敵の歩兵が駆け出してきて、伯の右手の手のひらを槍でつきさした。このようにして彼は致命的な傷を負った。彼は彼の騎士達に見守られて死んでいった。一方、伯ティエリは急速に彼の権力を拡大する。それ故に、一一二八年七月二九日に、伯ティエリは騎士達の巨大な勢力と共に、イープルに行き、そこを占領した。

伯ティエリは、まもなく権力を確立し、フランドルの支配は彼によって一元化された。伯ティエリはギヨームの死の時から主権をにぎり、すべての都市、即ち、アラス、テルアンヌ、サン・トメール、リール、エールなどで彼は聖職者と世俗の人々によって、彼の良き先任者たちの慣習に従って、好意をもって迎えられ、誠実とオマージュを呈された。それらの都市を訪問した後、ティエリは最終的にフランス国王とイギリス国王の許へ行き、両国王は、最も神聖で敬虔な伯シャルルが彼らから保持していた封土と聖職禄とを与え、彼を伯として認めたのである。

(Ⅲ) フランス国王ルイ六世の対応[14]

伯シャルル暗殺後の一一二七―二八年のフランドルにおいて、国王がどのような役割を果したかを検討することは興味深いものである。実際、国王の行動はユーグ・カペーの後継者による干渉の中でも、初めてある程度の効果があったものである。以下では、フランスの領域君主領の中でも最も強力で最も自立的なひとつであるフランドルにおける国王の権力行使の問題を考えたい。

前述したように、一一二七年三月二日ブリュージュにおいてシャルルは、有力家系エランバルド一族が行った反乱の犠牲となり、非業の死を遂げた。伯が政治的・社会的秩序を回復するために、エランバルド一族が不自由身分、即

ち、ミニステリアーレス出身[15]であることを明らかにしたからである。フランドルの状況は極端に混乱した。領域の重要な地域、特に南西部では、フランドル伯家の庶子であるギヨーム・ディープルの権力下におかれた。他の地方では、暗殺者とその支持者に対する暴力的反発が生じ、三月九日以来、暗殺者側の主要人物はブリュージュの強力な城砦に、周辺の騎士やブリュージュ市民により閉じこめられ包囲された。この攻囲軍には、すぐにガン市民達と伯領各地方からやってきた貴族達が加わった。

伯に子供が無かったため、伯領は直系継承者を失うことになった。伯の就任時ではあるが、恐らく、シャルルがその任につかんとした時に、フランス国王の裏からの妨害工作により、騒動が生じた。しかしながらこの妨害は表面化しなかった。国王は、ギヨーム・ディープルに伯を継がせるという工作を支持しなかった。シャルルは、前任の伯達と同様にフランス王権の最も忠実な重臣のひとりであった。

今回は、国王が干渉しなければならなかった。フランドルは国王の封土であった。多くの傍系相続者がおり、その中に決定的な資格を持つ者がいなかったため、封土の主君である国王の成すべきことは、伯にふさわしい資格を持つ別の人物を指名することであった。その上フランドルは、多くの問題で争っているフランス王権にとって、重要な支えであったので、ルイ六世はその長として信頼できる忠実な家臣を検討するように心がけねばならなかった。

国王の介入の第一局面はアラスにあった。ルイ六世は、伯暗殺の知らせを聞いてから、ここに赴き、一方では敵であるイギリス国王ヘンリ一世とブロア伯ティボー四世側の敵対行動を恐れていた。国王は三月一三日、少数の騎士を伴っただけでアラスにいた。国王はアラスへと貴族達を召集する書簡を送る。ガルベールはこのくだりを次のように述べる。即ち、三月二〇日、大修道院長聖ヴノアを祝う前夜に、国王は、アラスから攻囲の諸君主や貴族達に、彼の親戚であるシャルル、そしてフランドルで最も正しい伯の仇を討つことに対する彼のすべての感謝の念を送った。

「余はおまえたちに加わる好ましい機会を現在持っていない。何故なら、余は犯罪と攻囲について聞き知るやいなや、わずかな家臣達と共にここに急いでやってきたからである。何故なら、余が知り及んだので、籠城軍に対して、彼らの犯罪を防禦し、あらゆる方法で彼らの脱走のために

働く多くの者が依然としているから、この土地の裏切り者の中に余が落ちるのは賢明でないと思われたからである。……この土地は現在よりも一層重大な危機によって脅かされ、伯なしでは長く続くことは不可能である。[16]」

アラスはフランドルの南端に位置したが、ここの司教は国王と親密な関係にあり、すぐにも国王の権威下に入ろうとした。恐らく、国王はこの司教都市に滞在した。

到着して以来、国王は自らの主催で、フランドルの状況について審議をはじめた。この審議には、アラスまで国王に伴ったりあるいはそこで再び合流したフランス騎士が確実に参加していた。しかし、彼らに加えて、更に多人数のフランドル騎士も国王と協議を行った。まずは伯領南部の騎士達が、他の騎士達よりも速やかに到着できたし、あるいは国王のもとに自発的に赴いた。次に、ブリュージュのカストルム包囲に参加した騎士達であり、この者達を国王は、伯領北部の状況に関する情報を得てすぐに召集した。注目すべきは、この召集が命令書の形式で行われたことである。即ち、国王が自らの権威に服する人物あるいは共同体に命令を伝えるのに使用する形式である。国王の意志に従って、幾人ものフランドル騎士が、アラスに赴くためにブリュージュを離れた。

討議の主なテーマは当然、新たな伯の選出である。候補者は多かった。ギヨーム・ディープルは、伯領の一党派の指導者であり、シャルル暗殺者と利害を同じくすると疑われていた。国王は伯として彼を望まなかった。若きホラント伯ティエリ六世は、フランドル伯家と親戚関係にあり、ブリュージュ市民の商業を援助するのと同時に妨害できる立場にもいた。エノー伯ボードゥアン四世は、ロベール・ル・フリゾンにより追放された伯家の嫡流家系を代表する人物であるため、合法的な候補者である。アルヌルフ・ド・デンマークは亡き伯の甥であり、ティエリ・ダルザスはオート・ロレーヌ公ティエリの息子にして、母を通じてロベール・ル・フリゾンの孫である。

討議は少なくとも三月二三日まで続いた。ボードゥアン・ド・エノーは権利を引き立たせるために自らが現れた。国王に対しては、シャルルを継承するように求められたら、フランドルに厳正な治安を行き渡らせると約束した。恐らく、彼は更に別の約束をすると提案していた。彼に伴った一行多数のメンバーが、このやりとりで彼を支持した。この一行はルイ六世の目を引いたはずであった。一〇七一

年以来フランドルの伝統的な敵であるエノー伯を領主として戴く事への恐れから、伯として国王の息子のひとりを選出するよう要請するよう駆り立てられた者もいた。フランドルにカペー家の伯領を作ろうとするのは、国王を冒険的政策へと引きずり込む事でありいわんやフランドルを「王領」に編入するのは論外であった。

ルイ六世は、ノルマンディ公ロベールの息子でクリトンと呼ばれるギヨームを来させた。彼は、叔父であるイギリス国王ヘンリー一世にノルマンディ公領を奪われ、監視されていた。ギヨームの祖母でウィリアム征服王の妻であり、フランドル伯ボードゥアン五世の娘であるマチルドにより、フランドル伯領を相続する権利を彼は主張した。一一二七年三月二三日、あるいはこの少し後の日付であるが、国王はギヨーム・ド・ノルマンディをフランドル伯に任命し、居合わせた騎士達はこの問題に対する承認を表明した。

アラスでの会議の最終段階が展開した様子を理解できる。先ずは国王による「任命」があり、次に国王の要請で、騎士達が任命された候補者の「選挙」に取りかかった。恐らく、騎士のひとり、ゴーティエ・ル・ブティエが選挙を行った最初の人物であり、次にその他の者達が行った。ロベール・ド・ベチューヌ、イワン・ダロスト、リールの城主は、ギヨームを「支持した。」この選挙は、当時、「任命」の後で行われた殆どの選挙と同様に、出来れば満場一致で国王の任命、即ち国王の見解に同意するものであり、承認と約束を行うものであった。国王の視点に身を置いていたシュジェールは国王により成された決定を書きとどめるにしかすぎない。即ち、国王がギヨーム・ド・ノルマンディをフランドル伯にした、[17]と。

「選挙」に続いて、ギヨームをフランドル伯として国王の家臣とすべき法的行為か行われた。おそらくギヨームが国王に臣従し、忠誠の誓いを行った後に、ルイ六世はこの封土を彼に授けた。

アラス会議の法的性格を明確にするのが重要である。ここではフランスとフランドルの騎士が国王の主催の下で協議を行った。この会議は、廷臣会議（クリア・レギス）であり、国王の家臣から成っていた。しかしながら、フランドル騎士が、国王やその家臣と共にこの会議で議席を占めるように召喚されたことは、いかにして説明できるかむつかしい。

伯領が国王の手中にあり、国王が資格保有者に伯領を与えたために、国王はフランドル住民に彼の決定を示すのに、再び命令書を使用した。実際、国王はこの種の証書により、ギヨーム・クリトンの選出をブリュージュとフランドル全体に正式に通告した。同じ命令書で、国王はギヨームを伯として、領主として、彼に従うよう彼らに命じている。

国王の不安定な封土であり、空席で確かな相続者もいないフランドル伯領の授与は、特にフランドル騎士の内部で反対する者はいなかった。

別の社会階級の人々は、非常に急進的な立場を取り、国王が訴える事ができる実際的な権利に対抗して、全く別種類の主張をしようとしていた。即ち、市民がそうである。実際に、三月三〇日にブリュージュで国王の命令書が読まれたとき、この都市の市民は自分達の決定を用意していた。彼らは領主らとひとつの協定を結び、それにより契約当事者は新たな伯の任命に関しては、全員一致の承認のみで態度を決めると約束した。ブリュージュ市民が宣言したのは、自分達が国王の命令に従うか、それに服するのを拒否するかどうかを決める前に仲間と協議を行うということであった。

アラスでルイ六世の主催で開かれていた国王の会議は、さらにフランドル伯領の継承以外の問題を扱っていた。会議は司法的権限を行使して、シャルルの殺害者に死刑と財産没収を宣告し、没収された財産をブリュージュのカストルム包囲戦に参加したフランドル騎士に分配した。

国王の干渉の第二段階は当然ブリュージュにあったが、フランドルのその他の地方でも同じであった。司法的に第一段階と区別されるのは、それ以来、新しいフランドル伯がおり、伯領がもはや国王の手中になかった事である。

しかしながら、国王は新伯に伴い、フランドルでギヨーム・クリトンの権威を確立するために用意された全ての行動で決定的な役割を演じた。国王はアラスとリールでフランドルの家臣の伯に対する誓約と臣従の宣言に立ち会った。また、国王はブリュージュとガンの市民の代表者やブリュージュ城主との交渉にも参加した。ギヨーム・クリトンに伯の地位を承認するのと引き替えにこれらの都市に認めることになる特権の件に関してであった。そして、ルイ六世は伯と共に、シャルルに対する陰謀に巻き添えになったボードゥアン・アケット・エランバルドに代わって、ブリュージュの新城主を任命した。その人物はブリュージュ

北方の有力騎士で、暗殺者に対する闘争で主導権を握ったジェルヴェ・ド・プレである。

四月五日にブリュージュに到着してから、攻囲戦のみならずフランドルでの軍事作戦の全体を指揮したのは国王であり、伯はその手足の役割でしかなかった。非常に特徴的な次のような出来事が生じた。即ち、ある時、籠城軍と何人かのブリュージュ市民の間に接触が続いていたのが明らかになった。このような接触を禁じ、違反者に課すべき罰を定めたのは、国王の命令であり国王の会議で協議されたことであった。

フランドル伯はいたが、国王は幾つかの政治行為に参加し、自分自身で重要な行為を行った。国王につぐ支配者が伯領の頂点にいたが、伯の権威は安定していない。これらの状況を利用して、ルイ六世が新しい規範を認めさせようとしたことが確認できる。この会議は一時的にクリア・コミティス（伯の会議）を吸収する。

ブリュージュに新伯が居住する際に、国王は、その状況に慎重さを示した。一一二七年四月六日に伯がブリュージュ市民とアールデンブールの人々に、味方をした報酬として、彼らの新しい特権を保障した特許状を与えた時に国王は臨席した。だが、この特許状は伯の特許状であった。国王は市民に保証を与えるにとどめた。ブリュージュ市民は同じ日に誓約と臣従を行い、そのようにしてこの都市の市民が共同体を構成し、この共同体が領主に対して貴族の家臣と同じ権利関係を主張した時にも、国王は臨席した。だが誓約と臣従は伯に行われたのであり、国王にではない。多分、国王は四月六日に、ブリュージュで伯の家臣によりギヨームに行われた誓約と臣従の宣誓に出席したと推定される。また、おそらく伯は国王の面前で特権の証書をガン市民に授与した。

国王が将来における干渉の可能性を確保したという点でのみひとつの問題点がある。ブリュージュのサン・ドナティアン教会参事会の首席司祭についてである。これは非常に重要であった。遅くとも一〇八九年以来、サン・ドナティアン教会の司祭長はフランドルの高官であり、結果として伯領の膨大な領域の管理を行った。この人物は資格において、非常に裕福で尊敬される参事会の長であった。伯領への彼の影響力は、幾つかの状況で決定的であった。最後の資格保持者であるベルトゥルフがエランバルド一族の反乱の指揮者であったため、この地位は空席であった。

一一二七年四月六日、ブリュージュ到着の翌日、ルイ六世とギヨーム・クリトンは厳粛な会議に出席した。この会議中に、サン・ドナティアンの教会参事会員は特許状を朗読したが、その内容は、国王と伯が教会参事会の諸特権、とりわけ教皇勅書で規定したとされる自由でシモニアの汚点がない首席司祭の選出を確認し、これを尊重すると約束したというものである。しかし、国王の臨席の場合には、国王が選出された首席司祭を確認し、国王特有の権力においてその職に召き、国王の欠席の場合には、伯が代理人として彼自身の権力を行使して、首席司祭の叙任を果すべきであることが定められていた。多分、アラスで行われた事前交渉の結果により、国王と伯により起草された特許状が問題である。形式に関しては、この「祝福されたドナティアン教会の自由と特権の特許状」charta libertatis ecclesiae et privilegiorum beati Donatianiは国王の規範にすぎなかったが、ルイ六世の王璽が確実に押してあった。多分、伯は三人称でしか問題にならなかった。首席司祭の紹介と確認の権利は国王のものであった。

ルイ六世は他の理由から自身の特権を使用した。彼はブリュージュにこの司教区の精神的なリーダーであるノアイヨン司教―「国王の」司教である―を来させ、サン・ドナティアン教会の調停と伯シャルルの葬儀に取りかからせる事にした。全てが行われた時に、国王と司教はそろって、教会参事会の新しい首席司祭として教会参事会員であるロジェを、その職へと招き入れた。これは四月二五日に行われた。

ルイ六世は諸事件から多大な物的利益を引き出した。新伯に対して国王は一〇〇〇銀マルクという極端に高額な相続上納金の支払いを求めた。それにも拘わらず、この援助金はギヨーム・クリトン就任後の数ヶ月間に支払われ、最初この取り決めは秘密裏に成されたが、伯も国王もその後はこの事を隠す事もなかった。

非常に深い尊敬が国王の尊厳に対して、フランドルの騎士、聖職者及び市民により表明された。しかしながら、騎士、聖職者及び市民は大胆にも国王の宣誓を求め、国王はこの要求に素直に応じた。国王は反乱者を赦さぬ事を宣誓の下で約束した。国王が相続援助金を要求しないと約束したのは誓いを立てての事であった。サン・ドナティアン教会参事会員の請願により、四月六日に国王は教会参事会に授与された特権を尊重し、伯がこれを尊重するように注意

を払うと誓った。同じ日に、ブリュージュ市民の請願により、国王は誓いをたてて、伯により都市に認められ、伯の特許状に記録された特権を保障した。最後に四月一一日よりも前に、サン・トメール市民によってブリュージュに派遣された代表の請願に応じて、国王はやはり誓いの下で、伯によりこの都市に承認された特権を保障した。

いったん反乱者の降伏が受け容れられ、シャルルの葬儀とサン・ドナティアンの新しい首席司祭の就任が実現すると、国王にとっては果すべきひとつの職務が残ることになった。即ち、ギヨーム・クリトンを援助してふたりの継承権の主張者を排除することであった。このふたりとは、伯領の一部を占領しているギヨーム・ディープルとエノー伯ボードゥアンであった。

五月五日に二八名の反乱者の処刑を命じた後、六月に国王はブリュージュを去った。カッセルに到着すると、国王はロベール・ラァンファンを斬首させた。この者はエラバルドの家系のメンバーではあったが、ブリュージュ市民が愛情を持ち続けた人物であった。次いで、国王はフランドルを去った。[18]

しかしながら、翌年になると、国王は再びフランドル問題に腐心した。一一二八年の介入は「大封土」における王権行使の歴史にとって利益を示している。幾つかの事件が知られている。伯ギヨーム・クリトンは都市民に対して行われた約束を尊重しなかった。リール、サン・トメール、ガン、ブリュージュといった幾つかの重要な都市が抵抗した。一一二七年に排除された伯立候補者のひとり、ティエリ・ダルザスが貴族の一党派とガンやブリュージュの市民に承認された。第二の候補者でシャルルの甥であるアルヌルフは別の貴族集団とサン・トメール市民により支持された。

ギヨーム・クリトンは、動乱の先頭に立とうとしつつも、国王にすがった。伯がルイ六世にあてた書簡は、ギヨームをフランドル伯にしたのは国王であったのを想起させ、フランドルを「王国の中で最も忠誠で強力な部分」と形容していた。

この手紙によれば、伯は国王がフランドルに来るように懇願していた。伯にとっては、国王の存在がフランドル人に忠誠をよみがえらせるはずだった。国王はフランドル各都市に、四月一五日までに、アラスに八名の代表者を派遣するように命じた。その目的は、彼らと共に国王の宮廷に

おいて、市民と伯の間における紛争問題を協議し、両者間に平和を再確立できるようにするためであった。

自らの政策が前年に獲得した成功に勇気づけられ、最高権力の名において、国王は再びフランドル問題に介入した。伯の権威は無視されているが、国王自らの権力は揺るがないとルイ六世は思っていた。以上の事から、国王はフランドル人に命令を行った。しかしながら、ブリュージュ市民はこの命令に服従拒否で応じた。彼らにより行われたひとつの声明は、伯ギヨーム・クリトンの権威を拒否し、ティエリ・ダルザスの権威を承認する理由を示した。

四月二〇日頃、ルイ六世はコンピエーニュでギヨーム・クリトンの訪問を受けた。ギヨームは国王に、主君により家臣に与えられるべき援助と助言を求めた。国王は取りかかるべき役割の困難さを考慮し、カペー朝の国王が自らの権威を行使している別の力に訴えるのが有効であると彼には思えた。即ち、「国王」の司教団であり、この場合にはランスの大司教に訴えることであった。

国王は五月六日、フランドルのアラスで、荘厳なる大集会たる「宮廷」集会を召集した。ランス大司教と彼の管区の大部分の司教が、多くの聖職者や、国王の重臣も含む世俗の大物と並んで出席した。[19] その目的は、ふたりの敵対者のうちどちらが封土を所有し続けるに値するか、どちらが追放されるべきかを決定することであった。実際、展開したのは正に二重の訴訟行為であった。即ち、一方は、教会秩序による管区教会会議であり、他方は宮廷で行われた会議であった。ティエリは出頭していなかった。大司教とその教会会議はティエリと彼の支持者のすべてに破門の罰を与え、彼の権威に服するフランドル各地方を聖務停止にした。国王に関しては、ギヨームが合法的な伯と見なされるべきとの彼の宮廷の判決に従って、国王はティエリに、簒奪した封土を明け渡し、故国に戻るように命令した。

ルイ六世は、ティエリの籠城するリールで行った包囲戦は数日後の五月二〇日以前にはとかざるをえなかった。国王はアラスに退却し、次に直接に服従させている地域へ戻った。ギヨーム・ド・ノルマンディは非常に優れた軍隊の指揮者であったらしく、続く数ヶ月の一連の成功を勝ちとった。しかし彼はアローストの包囲で致命傷を負い、前述したように、七月二七日か二八日に息を引き取った。そのため、国王はティエリ・ダルザスに臣従を認め、同時に彼にフランドル伯領の授封を行った。

むすびにかえて

以上、一一二七～二八年のフランドルにおける政変とそれにフランス国王が果した役割を考察してきたが、若干の結論を記してむすびにかえたい。

それほど明白な関心があったとは言えないがカペー朝の国王ルイ六世の政策的関心については、次のように考えたい。即ち、フランドルのあらゆる人びとに王権の忠実な支持者としてあり続くことを国王は願った。国王はあと数歩を試みた。フランドルにいる時、権力の全てが国王のものであるかのように前面に出て、そして伯の権力が自らの権力に席を譲るかのように振るまった。また、教会組織が提供する可能性を利用しつつ、国王は自らを、フランドルで伯や大貴族の次に重要な人物たらしめた。けれども、国王は伯のように恒常的にまた身近に、フランドルのすべての人々に影響を与えたとは言えない。そして、勿論、伯政権が市民の意向を組み入れなければ安定しない程の市民階級の高揚が見られるのであるが、これに対しては、伯政権だけではなく、国王も市民の意向をうけとめるように腐心した。そして、総じて言えば、支配者階級の内部ではフランドル伯と大貴族についてフランス国王は重要な役割を果したと言える。

注

(1) 拙著、『北フランス・ベルギー中世都市研究』一九九五年、所収の「第二部　ベルギーの中世都市」に掲載の「第二章　十二世紀初期のフランドルにおける政変とエランバルド一族」と「第三章　十二世紀初期のフランドルにおける政治的変動」を参照されたい。

(2) 同上、三四八頁を参照のこと。

(3) 有効な史料群の文献解題は主として以下による。F. L. Ganshof, Le Roi de France en Flandre en 1127 et 1128, dans: Revue historique de droit français et étranger, 4e., 27, 1949, pp.206-207. 下記の本文で、特に注記しなくても、この労作を随時使うことを明記しておく。

(4) Suger, Vie de Louis Ⅵ le Gros, editée et traduite par H. Waquet, 1964, pp.240-251. 上記の英訳書、Suger, The deeds of Louis the Fat, translated with introduction and notes by R. Cusimano and T. Moorhead, 1992, pp.138-142. また、以下の仏訳書もある。即ち、Suger, La Geste de Louis Ⅵ et autres œuvres, Presentation M. Bur, 1994, pp.150-153.

(5) Gautier de Térouanne, Vita Karoli comitis, MGH., SS., XII.

(6) Herman de Tournai, Liber de restauratione S. Martini Tornacensis,

MGH.,SS., XIV.

(7) Histoire du meurtre de Charles le Bon, comte de Flandre (1127-1128) par Galbert de Bruges, avec une introduction et des notes par H. Pirenne, 1891. Galbert de Bruges, Le meurtre de Charles le Bon, traduit du latin par J. Gengoux, 1978. Galbert of Bruges, translated and edited by J. B. Ross, the murder of Charles the Good, 1993. 同上を底本とした翻訳、ガルベール・ド・ブリュージュ著・拙訳、『ガルベールの日記—中世の領域君主と都市民—』一九九八年、本稿では、以下の論述で特に注記しなくても、この訳本を主にしていることを明記しておく。

(8) 前掲拙著と注（7）の文献のほか以下を参照。J. B. Ross, Rise and fall of a twelfth-century clan, the Erembalds and the murder of count Charles of Flanders, 1127-1128, Speculum, 34, 1959. J.Dhondt, Les《solidarités》médiévales. Une société en transition : La Flandre en 1127-1128, AESC., 12, 1957. A.Wauters, Les libertés communales. Essai sur leur origine et leurs premiers développments en Belgigue,dans le Nord de la France et sur les bords du Rhin 1878. D.Nicholas, Medieval Flanders, 1992. 瀬原義生著、『ヨーロッパ中世都市の起源』（一九九三年）。斎藤絅子、「中世フランドル伯領」（『岩波講座　世界歴史、八、ヨーロッパの成長』一九九八年、所収。）西村由美子、「十二世紀フランドルの政治的転換期—暗殺・復讐そして反乱へ—」（『史学雑誌』第一〇六編、第一号、一九九七年、所収。）

(9) フランドル伯の任命表によれば、七九二年のリドリックから、シャルル善良侯が伯になった一一一九年まで、一五人の伯が三二七年間にわたって支配し、自分の名前を与えていた。R.C.Van Caenegem. Law, History, the Low Countries and Europe, 1994, p.78.

(10) ガルベールの記述は、一一二七年五月五日、更に、五月六日、五月七日、そして五月二一日についての叙述に続いて、九月一〇日の後の以下の描写にまでとんでいる。もっとも、一一二七年八月一日のリールの市民達の反乱の件が後述されている。

(11) 先ず、城主ウェヌマール二世にむけられたガンのこの反乱についてはCaenegem, op. cit.,pp.107-112.

(12) この会議には、両側からの貴族達、イワンらの側の大貴族たちと聖職者・民衆の間のすべての責任ある人々が参加するはずであった。しかし、伯は、定められた日に、軍隊と共にイープルへ行き、そこで戦うために準備して、支度をした騎士達や傭兵達で一杯にした。Calbert of Bruges, translated and edited by J. B. Ross, op. cit.,pp.268-270.（前掲拙訳、一七一頁から一七三頁までを参照されたい。）

(13) 前掲拙訳に対する高橋陽子氏の翻訳紹介『西洋史学』一九三、一九九九年、七六頁参照。

(14) 前掲拙著、この小論における注（3）、注（4）、注（5）、注（6）、注（7）、そして注（8）をそれぞれ参照されたい。

(15) 斎藤絅子、前掲共著、一〇七頁。

(16) 前掲拙訳、九六—九七頁。

(17) Suger, op. cit., par H. Waquet, p.246:《Comitem Flandrie Guilelmum Normannum, filium Roberti Ierosolimitani Normannie comitis.....constituit》.

(18) 前掲拙訳、一五四—一五五頁、一五八頁。Gautier, op. cit., c.50, p.559. Herman, op.cit., c. 35-36, p.288.

(19) 前掲拙訳、一九四—一九五頁。Herman, op. cit., c. 36, p.289:《Rursum petente Guilelmo rex cum archiepiscopo Atrebatum revertitur》.

(この小論は、奈良大学研究助成を受けた研究成果の一部である。)